

第 24 回 サセックス大学 IDS ジェンダーと開発修士課程(その 2)

こんにちは。サセックス大学開発学研究所(IDS)ジェンダーと開発修士課程の灘本です。全体的なプログラムの内容については、サセックス通信第 4 回で光岡さんより紹介がありましたので、今回は夏学期を終えての感想を率直に書かせていただきたいと思います。

実践的なカリキュラム

秋学期が「経済と社会問題」と「ジェンダーと開発理論」と理論中心であったのに対し、春学期から「ジェンダーと開発における主要問題」など実践的な授業が始まりました。この授業はコース責任者により毎年内容が変わるようですが、今年は教育、保健、環境などをテーマに異なる教授による講義が行われました。また、4 月からの夏学期では、ジェンダー配慮計画フレームワーク、ジェンダー研修、参加型アプローチ、インパクト・アセスメント、アドボカシー、研究手法、プロポーザル作成など、直ぐに実践に応用できる知識と技術をワークショップ形式で学びました。特に 5 月 28 日のフェミニスト・リーダーシップの授業では、昨年 9 月より今年の 4 月まで女性問題上級顧問としてイギリス政府よりイラクへ派遣されていたマンダナ・ヘンデシ氏が講師として招かれ、イラク女性の現実と紛争後の政権に女性が参加することの重要性などについて講義をされ、熱のこもった質疑応答が行われました。

ジェンダーと政治

このプログラムに関わる教授陣の中で、授業がエキサイティングでまた人間的にも魅力的な教授といえば、アン・マリー・ゴエズ氏があげられます。春学期に彼女による「開発におけるジェンダー・政治・国家」というコースが行われたのですが、「ジェンダーと国家」の分析から始まり、女性の政治参加、市民社会の役割、ジェンダーと人権、ジェンダー主流化をカバーし、グッド・ガバナンスで終わる準備が念入りにされたエキサイティングな講義をされました。しかも、二人の子供の子育てと自分の研究をしながら、20 人以上の学生の期末ペーパーの監督をするという荒業までやってのけ、働く女性としてまた教師としてクラスの尊敬を集めていました。ジェンダー主流化やジェンダーと政治に特に興味を持ってプログラムまたは授業を探しておられる方は、彼女が講義を担当する IDS のジェンダーと開発プログラムを選ばれば必ず満足するような知識が得られると思います。

IDS におけるジェンダーと講義の位置づけ

上記のようにこのプログラムは実践的で学問的にも触発されるものですが、IDS 自体の問題として 1) ジェンダー主流化されていない、2) 学生が主体ではないということがあげられます。1) のジェンダー主流化については、まずジェンダーと開発プログラムの責任者としてプログラムを監督する教授が誰もいなかったということがあげられます。プログラム・コンヴナーと名のつく人はいましたが、不可思議な講義の後、途中で産休に入りどこかに消えてしまいました。また、ハーバード手法と並び有名な社会関係アプローチが生まれた機関であるのに、研究部門にジェンダーグループが存在しません。有名なナイラ・カピールもとうとう最後までクラスに現れませんでした。IDS にはジェンダーと開発におけるエ

キスパートが多くいますが、それが 100%授業に活かされているかどうかは疑問です。

次に、2)のIDSでは学生が主体ではないという問題ですが、これもかなり深刻です。実はIDSは開発のための研究機関であって大学ではありません。数名の熱心な教授を除いて、研究者が片手間に教えているというのが私の印象です。これはIDSの学生への待遇にもあらわれていて、まずコンピューター・ルームのPCは3分の1壊れており修理される見込みがなく、その設備を担当している人もものすごく意地悪です。教授はいつも出張中でIDSにいないことが多いので、面接の予約を取るのがとても難しく論文などの監督を十分に得ることができません。

以上、教授陣の情熱と教育施設などネガティブな面もありますが、ロバート・チェンバーズの参加型ワークショップに一日中(嫌になるまで!?)参加できたり、アン・ホワイトヘッドの「ジェンダーと貧困」、アンドレア・コーンウェルの「ジェンダーと参加」など最近話題となっている講義を受けることができるので、ジェンダーと開発に関心のある方はぜひIDSのジェンダーと開発修士プログラムも候補に入れていただければ幸いです。

2004年6月25日

サセックス大学開発学研究所(IDS)

ジェンダーと開発修士課程

灘本 智子



最後のクラスの後の記念撮影